

2020年9月6日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 柴川久仁子

奏楽 大谷京子

前奏

招詞 IIコリントの信徒への手紙 第5章20節-21節

讃美歌 讃美歌21-151 (主をほめたたえよ)

交読 詩編 第110篇 (p. 124)

祈祷

聖書 マルコによる福音書 第12章35-37節

(新約聖書 p. 87)

讃美歌 讃美歌21-342 (神の霊よ、今ください)

説教 「イエスという王」

短い聖書箇所です。でも、とても大切な意味を持っています。もちろん聖書のどこでも大切な意味があります。けれどここで語られているイエスさまのお姿が、わたしたちの救いに

とって決定的な意味を持つものだからです。

イエスさまは神殿の境内で教えておられました。前の話の続きです。もうすぐ、イエスさまは捕らえられて裁判にかけられるという緊張の時です。エルサレムの神殿で、これまで律法学者、サドカイ派、ファリサイ派の人たちと論争を重ねてこられました。34節終わり、「もはや、あえて質問するものはなかった」と記された後で、ここではイエスさまのほうから敢えて語り始められます。しかも、この時、目の前にいるのは、律法学者、サドカイ派、ファリサイ派だけでなく、大勢の群衆であったことは、「大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた」という記事からあきらかです。その群衆に対して、語り始められるきっかけになされたのは、「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか」という問いかけでした。メシア、これはここで書かれているギリシャ語をそのまま言えば、「キリスト」のことです。そうすると、わたしたちからすれば、そうかイエスさまはもうここで、ご自分のことを明ら

かにしておられるのだ、ご自身の口からご自分のことを語り始めておられるのだと理解することができます。ところが、実のところ、この時はまだ、誰もイエスさまがキリストであるとは信じていません。そのことが決定的に明らかになっているわけではありません。まだ、メシアは、キリストは、救い主は来ていないと思っている人が大勢いた。そういう人ばかりだと言ってもいいかもしれません。そして、律法学者はそうした人たちに、その救いをもたらすメシアは、ダビデの子孫のひとりであるのだ、と言っていたのです。

そこでイエスさまが言われたことは、詩編第 110 篇を持って来られ、こう言われました。「**ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を あなたの足もとに屈服させるときまで」と』**」。いったいこれは何を言っているのか分かりにくいかもしれません。先ほどわたしたちはこの詩編第 110 篇を交読いたしました。この詩編の最初に、「ダビデの

詩、賛歌」とありましたが、今では、実際のダビデが歌った歌であるとは考えられていません。いったいどんな王が歌ったのか分かりませんが、ユダヤの民の中から、誰かが王位に就いた時、その即位の時に歌われた歌だと理解されています。ダビデの時代よりもずっと後の時代のものだろうと考えられています。ただ、詩編がダビデの歌と呼ばれることがよくありますし、また 150 篇の中にははっきりと、これはダビデの詩、ダビデの祈りだと記されている詩編が幾つもあるように、すぐれた信仰の詩は、ダビデのものとして帰せられました。どうしてそういうことになるのかと言えば、ダビデが、たいへんな英雄だったか、優れた人だったからです。このダビデが王として君臨したのは、今から 3000 年ほど前、紀元前 1000 年の頃だと言われています。おそろしく昔です。その頃、ここはどうだったでしょうか。日本の国などはありません。まだ縄文時代の頃です。そうすると、わたしたちの国が、ここが、全くどうだったのかと思われるような時代に、すでに、このユダヤの英雄は大きな国を造りました。もちろん大昔の頃ですから、ダビデの国

がどんな国境を定めていたかということはありません。その頃の地図を見るとはっきり線が引かれている所と、点線でこれぐらいではなかったかと推定される国境の所が記されている分がありますが、それにしても、今のイスラエル共和国よりもずっと大きなものでした。ユダヤの人たちの長い歴史の中で、こんなにも大きな国を造ったことは後にも先にもなかった。ダビデとその息子のソロモンの時代だけです。イエスさまがここで話しをしておられる頃から見ても、それよりもはるかに昔、1000年も前です。それから千年の間、かつて得た栄光を失った歴史の中で、いつの日かきつとあのダビデの王国を、もう一度自分たちの手にとずっと願い続けて、祈り続けて、歌い続けてきた。そこでこの王の即位の歌も、歴代の王のひとりではなくて、自分たちに決定的な勝利をもたらす、救い主としての王の即位の歌を、ダビデ自身が歌ったのだと人びとは信じるようになった。それを取り上げて、イエスさまは言われます。ダビデ自身が聖霊を受けて言ったではないか。神の霊の導きを受けて、救いの出来事について語ったではないか。

主—主なる神—が「わたしの主」、つまりここでは「まことの主」、「救い主」です、その「わたしの主」に対して、「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を、あなたの足もとに屈服させるときまで」と言ってくださった。「わたしの右に坐する」というのは、神さまのご支配を、その主、まことの王が実現するということです。すべての敵を屈服させるまで、まことの神の支配実現のために、戦う位置に就きなさいと約束してくださっている。主キリストは、これはその通りだと言われました。そこで何と言われたか。「このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか」。不思議な言葉です。ここでは、わたしの子、わたしの孫、わたしの曾孫、わたしの何代後の、こういう者に、と言っているのではなくて、ダビデにとって「わたしの主」だとしか呼びようがない方を王・メシアとしてお立てになる。そうだったらダビデの子であるはずはない。ダビデの子孫の枠から、はみ出た存在であるはずだろうと、イエスさまは言われます。これは

いったい、どういうことでしょうか。わたしたちを困惑させる  
問いです。

たとえばマタイによる福音書の最初には、「アブラハムの子  
ダビデの子、イエス・キリストの系図」とあります。マタイ  
ははっきりとイエス・キリストはダビデの子から繋がることを  
告げています。それから、クリスマスの時期に読まれる聖書と  
して、イザヤ書があります。「エッサイの株からひとつの芽が萌  
えいで その根からひとつの若枝が育ち その上に主の霊がと  
どまる」とあります。このエッサイというのはダビデの父親の  
名前です。ここでも、ダビデの家系を辿っていくと、その先に  
若い枝が芽生え育って、その若い、いのちが神の救いを実現す  
るものになる、これこそ主イエスであると歌います。預言者イ  
ザヤがそう語り、その通りのことが起こったと、教会は信じま  
した。

ところが、イエスさまはここで、単純に言えば、わたし

はメシア、わたしは救い主、けれど、その救い主が、どうしてダビデの子なのか、と言われました。そのまま理解すると、まるでイエスさまは、ご自分がダビデの子であることを否定しておられるかのようにさえ、理解することができる言葉です。だとすれば、いったいここでイエスさまは、何をおっしゃりたかったのだろうか、ご自身を何者だとおっしゃりたかったのだろうかと思います。

8月、そして9月になりまして、いよいよ年末の、これからのことを具体的に考えなければならない時期に近づいてきましたが、牧師やあるいは教会関係者とお話をしているなかで、今年のクリスマスはどうなるのだろうか、という話題が出ました。例年通りのお祝いの仕方が難しいのではないか、果たしてどんなお祝いの仕方ができるのだろうか、といった話題になりました。そして、お祝いをこれまで毎年繰り返してきたわたしたち、教会ですが、そのお祝いの理由はどこにあるのか。誰のために祝ってきたのか、ということあらためて思わ

されるようになりました。ここで不思議な言い方でご自身を言い表しておられるイエスさまがおられる。では、祝う側のわたしたちは、そのイエスさまの思いに沿って、みこころに適った仕方でお祝いできていたのだろうか。また、これから、何をどう祝おうとしているのか、そんなことを思います。

例えばクリスマスにまつわる話はいくつかあります。思い出してみました。アルタバン物語があります。これは占星術の学者が3人ではなく、実は遅れてもう一人行くはずだったという、そこから話が進む物語です。そして、それに似たもので、3人の占星術の学者のうち、一人に視点を当てて物語った話もあります。それはこういう話です。三人の占星術の学者たちのその後です。月日がたち、ふたりの者がすでに世を去った。一人残った者も残りの日々もそう長くはない。ただ、その年齢になるまで、彼がいつも心にかけていたことがあり、それは、自分たちが訪ねた、あのベツレヘムの幼子はどうしているだろうか、ということだった。自分の死が近いことを感じて、

もう一度それを確かめにユダヤの地を訪ねたいと思い、無理を承知で若い弟子を一人連れて出かけた。あの時、王さまになるべきお方として信じて献げものをして礼拝したのだから、王様であればきっと王宮に住んでいるにちがいないと訪ねて、ここに王はいるかと聞いたら、王さまはいないという。ここで支配しているのはローマの総督ポンテオ・ピラトだと言う。ではあの時、われわれはだまされたのか、との思いに捕らわれながらさらに訪ねていくと、確かイエスという名前だと言うと、ベツレヘム生まれのイエスは知らない。でも、ナザレのイエスなら知っている。でもそれは国家反逆の罪でもう殺された。そんなはずはない。わたしたちが尋ねているのは王だ。その答えを探しているうちに、五旬節の日が来る。巡礼が集まる。その中でお尋ねしていると、朝から、誰かが酔っ払って騒いでいるという噂が立って、人びとが駆けて行く。その中に自分も混じっていくと、やがて一人の者が話をしている。不思議なことに自分たちにも分かる言葉で。「エルサレムの人びとよ、あなたがたが殺したあのイエスを、神は甦らされた。それはその方が王にな

るため。しかし、われわれ人間が立てるような王といてではなく、神だけが立てられる王として」。聞いて驚いた。それが、わたしの尋ねている、あのまことの王イエスだ。もう年老いている、ペトロと呼ばれるその男の所に行って、わたしはあのベツレヘムでそのイエスという方を訪ねて誕生を祝った者だ、そのイエスに会わせてくれ、甦られたのならと頼んだ。ペトロは答えた。イエスはここにおられる。わたしたちは、そのイエスの目となり耳となり口となり手となり、足として働くことを許されている。わたしたちが、今ここで働いているところに主イエスはおられる。まことの主イエスはおられる。あなたは、ここで会えると言う。喜んで、この占星術の学者はそこに留まって、夜を徹して語り合う。祈る。分け与えられる食事に与る。そしてこう言う。「わたしたちが訪ねたあのベツレヘムの地は、今粉々に砕けて小さな星になった。そしてわたしたちひとりひとりの上に、わたしたちを指差しながら輝いてくれている。なぜなら、あの方はわたしたちひとりひとりの中に、新しい王としてお生まれになったのだ」。このふたりはやがて故郷に帰る。

そしてこの話は、こういう言葉で終わる。「それから後ペルシャ湾沿岸のどこかに、小さなキリストの教会が生まれたと伝えられる」。大切なことを伝える話です。歴史的な事実では全くありません。けれど、こういう話を聞くと、あり得ないこととは思いません。というのも、このマルコによる福音書の最初はこう記されているからです。「神の子イエス・キリストの福音の初め」。ここでマルコが、神の子イエス・キリストと言ったのは、神がこの世にあって働くということは、イエス・キリストにおいて見ることができるということであり、主イエスというお方が救い主としてこの世を生きられたことによって、神の子はこの世で生きて働かれたことになるのだということです。イエスを見ればそれが分かるということです。

律法学者が詩編第 110 篇を引用しながら、自分たちを救ってくれるのは、こういうダビデの子孫のひとりだと言っていたのとは、まるで違った仕方で、ひとりの王として、イエスさまはここに来てくださった。イエスさまは、ダビデの子である

ことを喜んで引き受けてくださった。けれど、律法学者たちが考え、理解するようなダビデの子ではなかった。律法学者に代表されるようなユダヤの人たちは、自分たちが待っているダビデの子は、ローマの人たち、そして異邦人の救い主になるとは、露ほどにも、一度も考えたことはなかったと思います。その足下に踏みにじられるべき敵は、ローマの皇帝であっても、ローマの人たちまでが救われるような、救いをそこに一度も考えたことはなかったと思います、そんなダビデの子は、彼らの頭の中にはなかった。けれど、主イエスは、その深い意図の中で、誰もが救われることを願っておられた。律法学者やファリサイ派の人たちは、同じユダヤ人であっても、罪を犯した人、徴税人たちまでもが、みんな、そのダビデの子の支配に浴することができるとは思っていなかったに違いありません。けれど、イエスさまはそうした人たちをも招いてやみませんでした。イエスさまがはっきりとご自身の言葉でお示しになったダビデの子の姿は、そのように全く違ったものだったのです。

「どうして律法学者たちは」を「どのような意味で律法学者たちは、メシアはダビデの子だと言うのか」と訳しているものがあります。ここで「わたしの右の座に着きなさい」という言葉から思い出すことがあります。わたしたちが唱和する使徒信条で、主が天に昇って、全能の父なる神の右に坐しておられる、とあります。そして、ペトロが伝道始めて間もない最初の殉教者、ステファノです。彼は石を投げつけられて殺されるとき、わたしは、主イエスが「人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言いました。ここは立っています。どうして立っておられたのか。おそらく、ステファノは立って自分を迎えようとしておられる主イエスのお姿を見たのだと思います。主イエスが立って、この殺されつつあるじぶんを見守っていてくださる。また、パウロは主イエス・キリストの甦りを、コリントの信徒への手紙第 I の第 15 章に書いたときに、この「わたしがあなたの敵をあなたの足もとに屈服させるときまで」という言葉を引用して、主の甦りの勝利は、この詩編第 110 篇の成就に他ならないとの確信を書きました。そして今わ

たしたちも同じように、その確かさの中であって、ここから始まる一週間を歩み出します。お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神さま、私たちの心をひとつにしてください、わたしたちを真実に支配してくださる、子羊である、王としての栄えをほめたたえます。今こそ、どうかあなたにふさわしい冠をささげ、賛美の歌を歌うことができますように。ここにいる者すべてが、主であるあなたの訪問を受けています。どうか、その喜びが、わたしたちにとって、なお地上に生かされている限り、生かし続ける力となりますよう、願います。主イエス・キリストのみ名によって感謝して、祈ります。アーメン

**讚美歌** 讚美歌 21-14 (たたえよ、王なる神を)

**献 金** 讚美歌 21-65-2

**報 告** 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。  
主なる神に仕え、隣人を愛し、  
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。  
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と  
聖霊との親しき交わりとが、  
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>